




審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 3017 号	氏名	長峯 理子
審査担当者	主査	矢野 博久	
	副主査	長藤 宏司	
	副主査	秋葉 純	
主論文題目： Clinicopathological Analysis of Myeloid Sarcoma with Megakaryocytic Differentiation (巨核球分化を示す顆粒球肉腫の臨床病理学的検討)			

審査結果の要旨 (意見)

顆粒球肉腫 (MS) は、骨髄球系前駆細胞が髄外に腫瘤を形成する稀な疾患であるが、巨核球分化を示す顆粒球肉腫 (MSmgk) は更に稀な病変で、これまでその臨床病理学的特徴を検討した研究は少ない。今回、11 例の MSmgk 症例を集積し、その臨床像の検討 (亜型分類、年齢、部位、個数、先行病変、予後など) 及び病理学的特徴の検討 (形態、各種表面マーカーの免疫染色及びフローサイトメトリーによる発現、染色体異常など) を実施し、MSmgk の特徴を明らかにしている。その結果、MSmgk は、先行病変として骨髄異形成症候群/骨髄増殖性腫瘍が高頻度にあり、病変が多発する傾向にあり、他の MS よりも予後が不良であることが明らかとなった。稀少症例を集積し、MSmgk の特徴を明らかにしたその意義は大きく、学位論文として極めて価値の高いものであると判断する。

論文要旨

顆粒球肉腫とは、骨髄球系前駆細胞からなる髄外の腫瘤性病変である。中でも巨核球分化を示す顆粒球肉腫 (MSmgk) は非常に稀であり、散発的に症例報告がなされているのみである。我々は MSmgk の症例 11 例について臨床病理学的検討を行った。

患者は7名が男性、4名が女性で男女比は 1.75:1 であった。年齢は2歳から78歳で、平均値は50歳、中央値は62歳であった。11例のうち3例 (27%) は単発病変、8例 (73%) では複数の病変が認められた。病変の部位はリンパ節 (6例)、皮下組織 (3例)、筋肉内 (1例)、骨 (1例) であった。7例 (64%) で患者には骨髄異形成症候群 (MDS) または骨髄増殖性腫瘍 (MPN) の既往があった。3例 (27%) は急性骨髄性白血病の寛解中での発生、残り1例は他の部位での顆粒球肉腫の既往があり、顆粒球肉腫の再発と考えられた。腫瘍細胞は免疫組織科学的に CD41、D33、CD34、MPO、CD68 にそれぞれ 11例 (100%)、3例 (27%)、7例 (64%)、4例 (36%)、7例 (64%) で陽性であった。巨核球分化を欠く顆粒球肉腫と比べて、MSmgk は有意に生存期間が短かった。

結論として、MSmgk は他の顆粒球肉腫に比して高率に MPN/MDS が先行し、多発病変を生じ、生存予後が悪いことが示唆された。この稀な病変の特徴を明らかにするために、より多数の症例の遺伝子も含めた解析が望まれる。